

稲作管理特報

令和3年4月16日
入善産米品質向上対策本部
黒東地域農業技術者協議会

みな穂の米づくりは、まず「土づくり」、「健苗育成」から始めよう！

品質の高い「みな穂米」づくりは、まず「土づくり」、「健苗育成」から始まります。

堆きゅう肥などの有機質資材やケイ酸質資材の散布による土づくりを必ず行いましょう。

また、育苗に当たっては十分な浸種期間を確保するとともに、温度管理と搬出後の換気を徹底し、活力の高い苗に仕上げましょう。

1 土づくり ～不足している土壌の成分を補給する～

土づくりは、継続することが重要です。耕起前に必ず実施しましょう。

ポイント1 堆きゅう肥による有機物の散布

- ・有機物を積極的に施用し、土壌の腐植分や保肥力を高めましょう。
- ・堆肥や発酵鶏ふんは、近年不足している「カリ」の補給にも効果があります。

○牛ふん堆肥(1t/10a)または発酵鶏ふん(春施用 75kg/10a)

ポイント2 ケイ酸質資材の施用

- ・土壌pHを改善させ、作物の養分吸収を高めるため、ケイ酸質資材は必ず施用しましょう。

○標準施用量 (①、②より選択)

①	「シリカパンチF」120kg/10a 施用	
②	「珪酸石灰」160kg/10a	+ 「苦土重焼燐」20kg/10a ※洪積地帯(山手)は 40kg/10a 施用
	「アサヒニューテツ」160kg/10a	+ 「苦土重焼燐」20kg/10a ※洪積地帯(山手)は 40kg/10a 施用

2 耕起・代かき ～根張りを良好にするとともに、除草剤の効果を高める～

- (耕起) ・作土を深くすることで、根張りが良くなります。
- ・耕起作業は、ほ場が乾いた状態でゆっくり起こし、作土深を15cm以上確保しましょう。また、作業速度を落とすとともに、ロータリの回転も低速(PTO1速)にして、ていねいに作業を行いましょう。

- (代かき) ・代かきは浅水にして稲わらをしっかりすき込むとともに、ほ場の均平に努めましょう。
- ・代かきは田植えの2～4日前に行ってください。
 - ・代かき後の濁り水は、ほ場外に流さないでください。また畦畔沿いに吹き寄せられたワラなどの浮遊物は除去しましょう。

3 育苗管理のポイント ～温度管理に注意し、換気を徹底する～

- (浸種) ・浸種袋の色分けやラベル付けにより、品種の区分管理を徹底しましょう。
- ・十分に浸種期間を確保しましょう(浸種期間の目安: 7～10日程度)。
 - ・浸種時の水温は10～15℃を保ちましょう(特に浸種初日は12℃以上を確保しましょう)。
 - ・浸種始めは2～3日程度、水は交換しないでください。
- (催芽、播種) ・催芽及び出芽時に「育苗器」を使用する場合、温度は30℃を厳守してください。
- ・播種量は、1箱当たり乾粃で120g(催芽粃150g)程度としましょう。
- (搬出) ・ハウスの搬出直後は、土が落ち着くまで水をしっかりかけましょう。
- (ハウスの温度管理) ・育苗ハウス内の温度は25℃を超えないよう、搬出直後から換気を行いましょう。ただし、夜温が10℃以下になると予想される場合はハウスを早めに閉めましょう。

4 苗箱施薬剤の散布 ～除草剤と間違えないよう、散布前に必ず確認する～

- ・は種時覆土前～田植え当日に、薬剤を均一に散布(1箱当たり50gを厳守)。

水稲品種	苗箱施薬剤
「コシヒカリ」 早生品種(「てんたかく」) 晩生品種(「てんこもり」、「新大正糯」)	ルーチンブライト箱粒剤

- ・「富富富」には、上記の薬剤を使用しないでください(別で発行する「富富富」特報でご案内します)。
- ・散布後は苗に付いた薬剤を払い落とし、軽く水をかけましょう。
- ・育苗後に育苗ハウスで野菜を栽培する場合、ハウス内での散布は行わないでください。

営農情報等をメール配信しています。今後の栽培管理等にご活用下さい。

- 主な情報提供内容
- ・水稲・大麦・大豆の生育情報及び今後の管理
 - ・気象情報と災害防止の対策

右のQRコードを読み込み、案内に沿って手続きして下さい。

